＜利用者の声＞

想い出のライブラリー

教育学部教授　笹本　正樹

米国をめぐったとき，カリフオルニア大学バークレー校の図書館によったが，緑あふれる丘の上にあり，金髪の美しい受付嬢だったことを想いだす。

東京での学生時代は上野にあった国会図書館に入りびたった。勉学にはよい雰囲気だった。こちらにきて「現代修辞的教育学」を書く時は，赤坂の国会図書館にコピーを沢山とりにいった。「北原白秋論」を書くときは，大阪府立図書館の“白秋全集”十八巻を調べにいった。「竹久夢二」を書くときは，岡山県立図書館に資料が沢山あり嬉しかった。

小説「さくらんぼ分教場」を書き，日本文学館に収めた時は，文士きどりの気分であった。柳河の北原白秋記念館を訪れたら，拙著が飾ってあった。今度の夢二本は，岡山吉備路文学館に収めにいった。夢二郷土美術館にも入っていると，人づてに聞いた。これらはなんとも著者冥利につきることである。

さて，本大学のライブラリーに憩っては，次に何を書こうかと想像するのが，近頃の楽しみである。

フランス文化と図書館

法学部助教授　渡邊　和行

図書館は，一国の文化的水準を示すバロメーターの1つといってよいであろう。文化大国を自認するフランスは，文化を国策として掲げる代表的な国である。最近の大統領選挙の際のミッテランの発言や二大保守政党の共同声明が，それを示している。

それでは図書館は，フランスの文化とどのように関わってきたのであろうか。結論的に言えば，図書館は近代の文化を基底で支える制度として重要な役割を演じてきたということである。図書館は，近代的な知の形成と連動しているのである。なぜなら識字率の上昇・ジャーナリズムの発達といった事柄を抜きにして，図書館というものを考えることができないからである。その図書館は，古文書や公文書の収集・保管という過去を保存する機能と，図書の閲覧・貸出による公民教育の機能とを担ってきた。

図書館へのこのような期待が高まったのは，第二帝制期の1860年代のことである。ときの政府は，各学校や自治体に図書館を設置することと，小学校の教師に運営を委ねる成人学校の創設とを積極的に推進したのである。その結果，1869年に図書館は，14,395 館，所蔵図書合計995,121 冊に及び，成人学校も1865年に8,000校，1869 年には，33,000校に達した。第三共和政期の1880 年には，1万冊以上の蔵書をもつ図書館は505館となり，その蔵書数は7298千冊を数えた（同期の英：202館，377万冊。独：594館，407万冊）。こうして図書館の設置と図書館を活用する成人学校が奨励され，教養の向上を図るキャンペーンが展開されたのである。この精神は第三共和政にも受けつがれ，初等教育の義務化と民衆大学の開設をもたらした。その間も図書館は，いわばフランス文化の貯蔵庫として位置づけられ利用されたのである。

ところで，わが国の図書館は文化装置としての機能を十分に果たしていると言えるであろうか。

図書館のイメージ

農学部教授　西山　壮一

図書館の語感から受けるイメージとしては，私には官学的な建物・整理・整頓・親切なる職員の方々……と次々と浮かんでくる。大学院の学生の頃，よく工学部のある学科の図書室に本を借りに行っていたが，そこの職員の方が目的とする本を探すのが速くて，感心したり，驚いたりしていた。今から考えると，これこそ整理の賜である。我が研究室の資料もこのようにあってもらいたいと思うが，なかなか進まない。図書館では，計算機が導入される条件が整い，おそらく大学の中では，最初に機械化されたに違いない。私の予想であるが，情報化時代がさらに進むと，全部の本ではないが，本そのものがコンパクトなディスクに入り，種々様々の利用方法が発達すると思われる。現在のように，本をいちいちコピーして利用していては，時間，手間がかかる。また，本を保管するスペースも，長い年月の間には，バカにならなくなる。大量のデータを印刷物としてよりも，テープ等でいただいた方がより利用価値があることからも，発展方向は大略予想がつく。

このように考えると，図書館のイメージも，今後は少しずつ変わり，情報処理，コンパクトなディスク等が，先に浮かぶに違いない。

最後に学生に苦言を申し上げて本稿を終りたい。学生が実験等のレポートを書く場合，図書館の本を利用することは多いと思う。少い例ではあるが，レポートは立派